

鯨 研 通 信

第 345 号

1982年 7 月

財団法人 鯨類研究所 〒 135 東京都江東区越中島 1 丁目 3 番 1 号 電話 東京 (642) 2888 (代表)
日本捕鯨協会

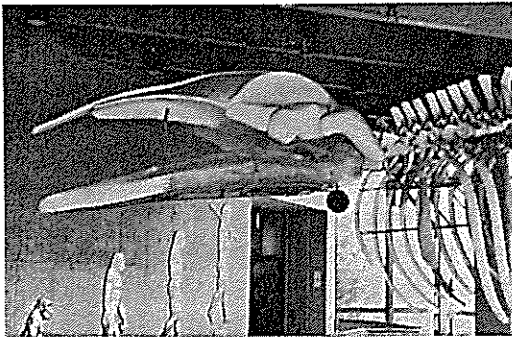


市 川 の 鯨

鯨類研究所 大 村 秀 雄

市川の博物館と鯨

去る 3 月上旬のある土曜日のことであった。鯨研へ出勤途中の私は、今日こそ市川の鯨を見に行き来ようと考えた。市川の鯨とは、前々から、共同捕鯨の稲垣社長から聞いていたもので、市川市内から出土したものであり、同市の博物館にあるという。出土したという以上、大分古いものであろうし、東京湾という場所から考えて、ひょっとしたらコククジラではなかろうかと考えた。それは最近アメリカ東海岸からも、半化石のコククジラの骨が発掘され、問題になっているからである。日本からも出てくるのではなかろうか、いや出て来て欲しい。これが私の念願でもあったのである。しかも私自身はここ 2 カ月ぐらいの間に、日本のコククジラの歴史という論文を書き上げなければならぬ立場にあった。これを書く前に、先づ確める必要があったのである。



第 1 図 市川市立博物館の鯨

鯨研に着いた私は、そのことを告げて、早速飛び出して、東西線で西船橋に出て、そこで乗換えて市川に着いた。タクシーで博物館に着いたが、予想に反し

て、誠に近代的なスマートな建物であることに一驚した。入口に入って右側に受け付けがあったから、鯨はどこですかと尋ねたら、それですと指さされた。私の立っている大広間の天床に、頭と脊椎骨と肋骨の一部が組み立てられて、吊り下げられている(第 1 図)。入った時は、こんな大きなものが限に入らなかったのである。

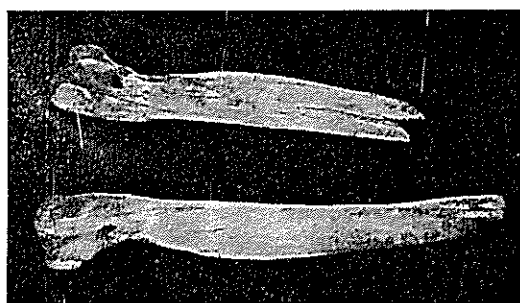
それにしても変てこな鯨だ。これが私の第一印象であった。頭蓋骨は作り物であるが、鯨の頭蓋骨にしては変な格好だ。それにしても問題は下顎骨である。左右の下顎とも先が欠けていて、その部分を白く補ってあるが、それより問題は関節部分である。第 2 図の写真は博物館から借用したものを複写したものである。これと第 3 図の写真とを比較して貰いたいのである。第 2 図では上が左側、下が右側の下顎骨である。第 3 図はニタリクジラの左側の下顎骨である。市川の鯨は、説明にはイワツクジラとなっているから、その近縁種のニタリクジラの骨をここに掲げたのである。この骨は 1978—79 年漁期、鯨の調査研究のための特別許可に基づいて、東部印度洋で捕獲されたもので、実物は現在は鴨川のソーワールドにある。

コククジラの特徴

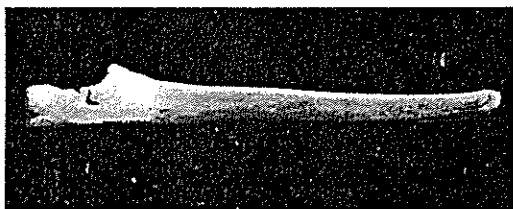
ヒゲ鯨にはセミクジラ科、コククジラ科、ナガスクジラ科の 3 科があり、コククジラはセミクジラ科のものとなガスクジラ科のものとの中間にあるが、どちらかと言えばセミクジラに近いであろう。セミクジラと同様脊ビレはないが、この辺りに数個の瘤がある。セミクジラと同様、腹側に敵はないが、2—3 条の溝がある。頭の格好は横から見ると、セミクジラでは大きくアーチ状に彎曲しているが、ナガスクジラ科のもの

は殆んど水平に伸びている。コクジラはこの中間型で、下にアーチしているが、セミクジラほどではない。頭蓋骨も同じである。但し下顎骨は違っている。下顎骨はコクジラ独特のものであり、この点ではむしろセミクジラはナガスクジラ科のものに近い。

先づ第3図のニタリクジラの下顎骨を見て載きたい。写真の左側の先が関節部分であり、右が先端である。関節部分の寸し前の処に、三角形の突起がある。この突起が筋突起 *Processus coronoideus* である。この部分が一番高い。この筋突起は、ナガスクジラ科のもの総てにあり、セミクジラにもあるが、コクジラにはない。第2図のコクジラの下顎骨は、この突起が欠けてなくなったのではなくて、始めからないのである。骨自体の形も大分異なっている。コクジラの下顎骨は頑丈であり、全体として高さが高い。関節部が一番高く、それより先が少しくびれて細くなるが、それを過ぎると、なだらかに再び高くなって行く。この形はコクジラ独特のもので、この特徴をのみ込めば、間違ふことは絶対ない。



第2図 コクジラの下顎骨（上左、下右）



第3図 ニタリクジラの左下顎骨

稲垣さんからは、この外にもう一頭分掘り出されたものがある、と聞いていたので、それを告げると、係りの人が親切に、あちらこちら問い合わせ、この直ぐ下の資料館にありますと言って案内してくれた。これは何れも小さな骨の破片で、特徴のある部分はなかった。種類の鑑定はできない。ただ脊椎骨の椎体と骨端の破片が、ばらばらになっていたから、まだ未成熟

の鯨であることには間違いはない。

その日はそのまま帰ったが、それから10日ばかり経った後、今度は海洋研の粕谷さんと鯨研の加藤さんをさそって、3人で博物館に行った。長い梯子を借りて、若い人に登って貰って、長さや高さの測定を行った。右側の骨の全長が222cm 関節部の高さが35.6cm、その直前のくびれた部分が21.5cm、それより前の一番高い部分が29.7cmであった。

なおこの日は Andrews の論文の中の写真のコピーとニタリクジラの写真を持参して、コクジラに間違いないことを説明した。アンドリュウスの論文とは、アメリカのニューヨーク博物館のアンドリュウス氏が、韓国の蔚山に滞在してコクジラを調べて、発表したもので(1914)、下顎骨の写真も掲載されている。

なおその際市川市史を見せて貰った。それによると市川の鯨は、昭和41年(1966)に市川電報電話局の工事の際、地下約4mの所から、貝化石と共に発見されたもので、貝化石のC¹⁴法による年代測定では6,260±150BPであるという。BPとは Before Present のことで、今から何年前ということである。つまりこの鯨は、今から約6,000年前のものである。地球の歴史で言えば、コクジラは第4紀の始めから、地球上に棲んでいたから、市川の鯨といえども現存種である。

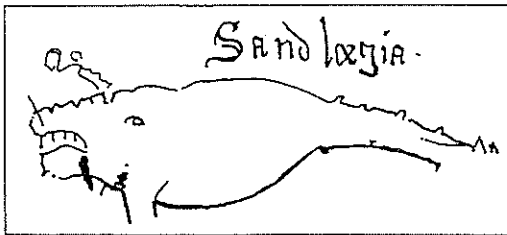
第4紀は地球上の気候の激変期である。寒冷な氷期と温暖な間氷期とが相次いで興った。氷期には海水が氷結して、海水面がぐんと下がる。間氷期にはこの氷が融けて海水面は高くなる。最後の氷期の最盛期は18,000BPだとされている。この時の海水面は現在より80m以上も低かったという。この時代が過ぎると、間氷期となり、海水面は序々に上昇して、今までの陸地の上に進入して行く。これが海進である。市川の鯨はこの海進(縄文海進)の時代に東京湾に入ったのであろう。

地球上の気候が激変しても、海水の温度には変りがない。それは水には氷結という現象と蒸発という現象があるからである。水温そのものには変化はない。水位が上がったり下ったりこれに伴って、海の面積が広くなり狭くなったりするだけである。鯨はその機動力を生かして、それに応じて移動して行けば、陸上動物ほど気候の影響を受けることはない。鯨にとって一番怖いのは、人間という陸上動物の悪業であろう。これは何も捕獲だけを意味するものではない。コクジラにとって、一番怖いのは、開発という名の環境破壊であろう。種そのものは条約によって保護されている。

北大西洋のコククジラ

コククジラは現在では北太平洋だけに棲んでいる。ただしかつては、それも18世紀の初め頃までは北大西洋にも棲んでいたとされている。スウェーデンやオランダから、半化石の骨が出土しているし、最近ではアメリカの東海岸からも半化石の骨が出土して話題となっている。さらに1725年にダットレイという人の書いたスクラグ鯨というのがある。このスクラグ鯨は脊ビレがなく、その代わりに、この部分に6カ程度の瘤があり、ヒゲは白いとされている。これはコククジラの特徴であるが、おかしな点は、その形と産油量はセミクジラに近いと書いてあることである。形が似ているのはいいとして、セミクジラは、他のどの鯨よりも太っていて、産油量も一番多い鯨である。コククジラは、この反対に、ミンクを除いて、一番小さな鯨であり、産油量も少ない。この点が違うが、これは何かの間違いで、スクラグ鯨はコククジラだとされている。

さらに英国の著名な鯨学者のフレーザーは、17世紀の初期にアイスランドにコククジラがいたと主張している。その論拠は、アイスランドのグドムンドソンによって描かれた海産哺乳類の絵である。この絵の中に Sandloegia という動物がある。これがコククジラで



第 4 図 アイスランドのコククジラ

あるとしている。この図を第 4 図に示した。口の中のたての線、これはヒゲを意味し、脊中の後所にあるギザギザ、これが瘤であるとしている。脊ビレと敵はない。この図の説明には歯の代りに白いヒゲがあると書いてある由である。なお、Sandloegia とは Sand-lier のことで、この鯨は生命力が強く、アザランのように、陸上に上がって、1日を超すことが出来るとも書いてある由である。アメリカ沿岸でも、干潮で砂上に置いてけぼりにされたコククジラも観察されている。サンディエゴの水族館で、かつてコククジラの子を1年間飼育したことがあるが、その仔は、このようにして砂上に置いてけぼりにされた鯨であった。

日本では常陸風土記、行方郡の条に次の記事があ

る。

「南に鯨岡あり。上古の時、海鯨（クジラ）はらばいて来り臥しし所なり」（進藤直作、瀬戸内海の鯨の研究）。これもコククジラであったのかも知れない。

上記のフレーザーの論文は1970年に発表されたのであるが（Investigations on Cetacea II）、北大西洋にコククジラが果して棲息していたかどうか、この論争にこの論文が終止符を打ったかのようである。さすがは大御所、ツルの一声であった。その大西洋に今日ではコククジラは棲んでいない。18世紀になってから、人間が捕り尽したのか、或は人間活動によって、棲息場所、特に分娩、育児を行なう、浅瀬の内湾の環境が破壊されたか、その何れかである。北大西洋でもコククジラがいたとされているのは、アイスランドとアメリカ東岸である。アメリカ西岸の北太平洋ではまだコククジラは健在である。アメリカ東岸にはもはやコククジラはいない。その差はどこから来たのであろうか。

北太平洋のコククジラ

北太平洋のコククジラには2の系統群がある。1はアメリカの系統群であり、夏はベーリング海峡を越して北氷洋にも入るが、冬は南下して、カリホルニアやメキシコ沿岸で、分娩、育児等一連の繁殖行為を営む。この系統群のものは、19世紀の後半に、大打撃を受けた。帆船捕鯨船がコククジラの繁殖場である内湾に入り込んで、手当たり次第に捕獲した。さらにカリホルニア沿岸では、小形のボートに船首砲（グリーン砲と呼ばれた）を据付けて、これにボンブランズを併用して、盛んに捕獲した。このような沿岸捕鯨の解剖場に、日本人が働いていたという記録がある。なお明治時代の日本の鯨の解剖は、ボック式といって、棧橋の先端部分に脚立を組んで、鯨を宙吊りにして解剖した。これはアメリカ式であった。それ以外は解剖船を使った。ここに言う解剖船も船上で解剖するのではなくて、舷側解剖であった。

このように帆船捕鯨とカリホルニアの沿岸捕鯨によって、コククジラの資源は大きな打撃を受け、カリホルニアやメキシコ沿岸から姿を消してしまったといわれている。ただし絶滅したのではなかった。北方海域にはまだ残っていた。1930年以前にも、沿岸で操業した鯨工船でも捕獲されたが、もっと北方で、ソ連の捕鯨母船アリュート号によって、毎年20—100頭が捕獲された。1940年に操業した日本の函南丸も、ベーリング海峡を越した北氷洋で58頭を捕獲した。

第2次大戦後アメリカ側のコククジラはめきめきと回復した。スクリップス研究所のハプス博士御夫妻とギルモア博士が、戦後のコククジラの研究に大きな貢献をした。今度サン・ディエゴにある鯨類研究連合 Cetacean Research Associates が、その功績を讃えて、コククジラという論文集を出すこととなった。出版はアカデミック・プレスが引き受けて、明年10月には出版されることとなっている。この論文の原稿の締切りが6月下旬であり、私はこれを書く前に、市川の鯨を調べる必要があったのである。

アメリカ側の系統群が、急速に回復した原因は2つあると思う。その1は餌が少なくとも他のヒゲ鯨と競合しないことである。他のヒゲ鯨はオキアミやカラヌスやその他小形の魚を食べるが、これらは表層生活者である。これに反してコククジラは、右側のヒゲで海底の砂を起こして、そこに棲む小動物を飛び出させて捕食する。胃の中には砂がたまっている。

第2は分娩育児の場所である。アメリカやメキシコの沿岸の、遠浅の小湾が、そのまま残っていることである。最も有名なのはメキシコのスキヤモンズ・ラグーンであるが、これはアメリカのスキヤモンが最初に帆船を乗り入れて、いわゆる内湾捕鯨の先鞭をつけた所であるが、湾そのものは当時と同じ状態に、手着かずに残っている。人間の開発が進んで、沿岸に工場でも出来たら、もうおしまいである。サンディエゴのミッション湾は、元来コククジラの繁殖場であったが、今日ではもう彼等はやって来ない。この沖を素通りして、もっと南のメキシコへと行く。今日ではミッション湾からコククジラ見物船が出て、鯨を追ってメキシコまで行く。

日本のコククジラ

アジア側の系統群は、夏はオホーツク海北部で索餌をする。冬はそこより南下して朝鮮半島の沿岸に沿って蔚山沖を通り、朝鮮半島の南岸の、海岸線の複雑に入り込んだ海域で、分娩、育児をされると考えられている。但しこの外に、日本の沿岸にやってくる、いわば分派がある。これを証明するものは市川の鯨であるが、この外に、江戸時代の捕鯨で和歌山県や高知県で捕獲されていたから、当然このグループのものは、日本の東岸を北から南へと回遊して来たものである。この系統群のもの分娩育児の場所は、瀬戸内海であったと考えている。それは進藤直作さんの「瀬戸内海の鯨の研究」の中で引用されているのであるが、東光治の「続萬葉動物考」の中に次のような記事があるから

である。

「瀬戸内海の祝島（山口県熊毛郡上関町）の沿岸はナガス鯨の出産地で、毎年60～70頭の鯨群が集り、時には仔鯨の死体が海岸に打上げられる事がある。」

ここで問題はナガス鯨である。ナガスクジラにはこのような内湾で分娩育児をする習性はない。外洋である。上記の文章の中で、瀬戸内海の祝島という文句を、メキシコのあるラグーンの名前に代え、ナガス鯨をコククジラとすれば、立派にまかり通る記載となる。このような記載はコククジラ以外に考えられない。

さらにケンベル著斎藤信訳、江戸参府旅行日記（東洋文庫393、平凡社）からも推察される。この本の236ページに「われわれは今日たびたび小さい鯨を見た。この鯨をオランダ人はノルドカベルスと呼んでいる」と書いてある。時は1691年4月30日、所は三田尻附近である。このことは最初矢代嘉孝さんから教えて貰って、ついでにノルドカベルスとは何であるかと質問されたが、吉原友吉さんの「鯨の墓」にも書いてある（40ページ）。このノルドカベルス Nordcaper とはセミクジラのことである。ただしここでは小さいと断っているからコククジラであろうと考える。コククジラは克鯨とも書くが、本来は児鯨で、鯨の中で一番小さいから、こう名付けられたと昔の本に書いてある。現在では仔鯨と間違えられないようにコククジラと書くだけのことである。前にも述べたようにコククジラは、外形や汐の吹き方はセミクジラに似ている。

ところでケンベル Engelbert Kaempher (1651—1716) はドイツ人の旅行家兼医師で、1690年9月に長崎に到着した。オランダの東印度会社の医師としてである。彼は2年間日本に滞在し、その間に2回江戸を訪れた。この記行は第1回の江戸参府の帰途のことである。彼は1693年に帰国するが、1716年の11月2日に死亡する。

彼が見たのは三田尻附近であるから、この鯨は太平洋岸を通って来たものであるかも知れないが、日本海沿岸を通って来たものであるかも知れない。あるいは両者がここで相混合するのであるかも知れない。この問題については後でもう一度ふれたいと思う。

ここで日本海沿岸から九州西岸で獲れたコククジラのことを考えてみよう。これらの地方でも江戸時代にコククジラが獲れていたことは事実である。このコククジラがどのコースをとって、ここまでやって来たか、それが長い間の疑問であった。しかしながら吉原友吉さんが京都府伊根の捕鯨を纏められ、その捕獲統

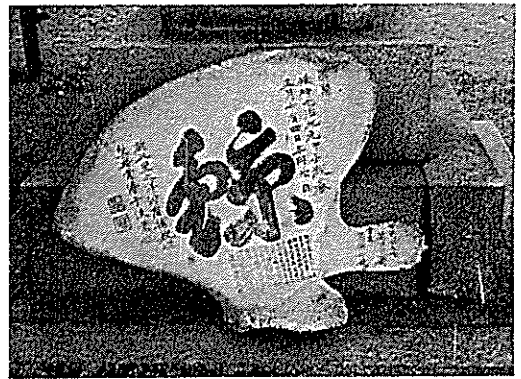
計を明らかにして下さったので、明瞭となったのである。伊根では天文年間から捕鯨が行なわれていたと言われるが、明暦 2 年 (1656) から大正 2 年 (1913) までの実に 258 年間の、鯨種別捕獲記録が残っている。この 258 年間に捕獲されたのは、ザトウクジラ 162 頭、ナガスクジラ 120 頭、セミクジラ 37 頭、計 319 頭であり、コクジラは捕獲されていない。

コクジラは、既に述べたように沿岸性の鯨であって、岸に接して遊ぶ。アメリカでは海岸の望楼から沖を通る鯨の数を勘定して、資源量を計算した。この望楼は、戦争中日本の潜水艦を発見するために作られたものであったが、いいことに役立つものである。京都の伊根にはこのような望楼はないが、岸伝いにやって来た鯨は伊根湾に入り込む。これを見済して、伊根の漁民はその入口を塞いで、その中で鯨捕りをやる。ナガスクジラやザトウクジラは、死ぬと水中に沈むから、伊根以外の地方では、いわゆる網取り式捕鯨が開発される前は、捕獲されなかった。伊根では入口を塞いで、地曳網と鉆を使ったから捕獲出来たのであろう。

いずれにしても、伊根で捕獲できなかったことは、日本海の東岸、つまり日本列島の西側を通過して、南下して来たコクジラはなかったこととなる。ではどこから来たか。朝鮮半島の東岸を南下して来たものの 1 分派が、山口県の見島を通過して通浦 (現在の萩市) 附近に達し、ここよりコースを西に転じて、九州西岸にまでやって来たものと思う。その際一部は、当然のことながら、関門海峡を通過して、瀬戸内海に入ったものと思う。

それでは瀬戸内海の鯨は、全部が全部朝鮮半島から来たものか。それはそうではない。太平洋系統のものが入ったことも事実であろう。進藤さんは、大形鯨の九州東回遊路を提唱しておられるし、明治の終り頃と思うが、佐賀関に根拠地 (鯨体処理場) が設けられたことも事実である。但し佐賀関の根拠地はイワン (おそらくニタリ) 3 頭を獲っただけで閉場となった。時既におそかったのであり、この時はもう瀬戸内海に入り込む鯨が少なくなってしまったのであろう。瀬戸内海に鯨が入り込んだのは、ほぼ今世紀以前のことである。今世紀以前には日本海を通過してやって来たコクジラも太平洋岸を通過して来たコクジラも、共に瀬戸内海に入って、ここで相混合したものと考えられる。とにかく万葉以前から江戸時代の終りにかけて、瀬戸内海はコクジラの交尾、分娩、育児の場所であったと考えられる。

そのコクジラも、明治 30 年頃日本の捕鯨が、ノルウェー式捕鯨に転換すると同時に、日本の近海から姿を消してしまったのである。網取り式時代の捕鯨で、最も重要種はセミクジラとザトウクジラであり、これについて日本海側ではナガスクジラ、太平洋側ではニタリクジラであった。ニタリクジラはイワンクジラとなっているが、現実にはニタリクジラであったと考えている。コクジラも捕獲されたが、いわば混獲の程度であり、重要種ではなかった。これらの鯨種の中で、近代捕鯨に移行する前に、大きく減少したのはセミクジラで、これはアメリカ帆船捕鯨船の操業の結果である。彼等は北洋でも多数のセミクジラを捕獲したが、日本海でも大々的に捕獲した。日本近海では、太平洋側でマッコウクジラを捕り、日本海に入ってはセミクジラを捕獲したのである。



第 5 図 川之江の鯨の肩甲骨

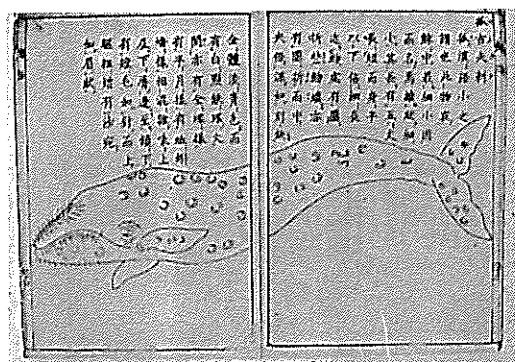
そのためセミクジラは大きく減少したが、コクジラについては、そのような事実はなかった。彼等が捕獲したのは、アメリカ系統群であり、アジア系統群は彼等とは無関係であった。

近代捕鯨になってから、和歌山県でも高知県でも、明治、大正年代には、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、それにザトウクジラがよく捕獲された。日本海側ではナガスクジラが捕獲された。ただしザトウクジラは少ない。日本海側のザトウクジラだけは、江戸時代の捕鯨の獲り過ぎであったものと思われるが、コクジラについては、そのようには考えられない。その主な原因は、やはり瀬戸内海沿岸の開発と船舶の航行の増加の結果であると考えざるを得ない。

瀬戸内海で現実にコクジラが捕獲されたのは、愛媛県の川之江である。ここでは文久 4 年 (1864) 1 月に 2 頭のコクジラが捕獲された。この鯨の図が、同市に今日でも残っている役用記に書かれている。1 号鯨は小さくて若い鯨と思われるが、2 号鯨は青崎と書

いてある。これはアオサギのことであろう。なおこの鯨の肩甲骨一枚が同市の八幡神社に、絵馬として奉納されている（第5図）。私もこの骨を調べたが、コクジラのものに間違はない。

江戸時代には、鯨や捕鯨に関する本がいろいろ書かれているが、その中でコクジラはどのように扱われているか、それを次に紹介しよう。日本で印刷された最も古いものは鯨志である。これは山瀬春政の著で宝暦8年（1758年）の出版である。「春政は紀伊の人にして、通称を梶取屋治右衛門といい、号を如水軒という。船生若水の門人にして、物産に精しく医術薬舗等を業とせり」ということとなっている。第6図に鯨志の中に描かれているコクジラの図を示した。簡単な



第6図 鯨志のコクジラ

説明もある。背ビレもなく敵もないが、体の背面後方の部分にギザギザが描いてある。上顎の上面と下顎に、比較的太くて長い毛が描いてある。これらはコクジラの特徴である。体一面に円形又は半円形の模様を描かれているが、これはフジツボが寄生した跡である。体は青灰色であるが、ここにフジツボが寄生し、それが脱落すると、その跡に白い模様が残る。このようにフジツボが寄生するのは、沿岸性の鯨であることの一つの証拠で、同じ沿岸性のザトウクジラにも寄生する。

江戸時代の鯨に関する本で、最も総合的に書かれたものは、仙台藩学校養賢堂学頭大隈清準の「鯨史稿」である。この本の原稿は文化4年（1808）に完成されたとされているが、印刷されたのはずっと後の大正14年（1925）で、この時仙台叢書として印刷されたのであった。これを基にして昭和26年3月に、日本捕鯨協会によって再版された。この本ではコクジラの外にチコクジラという名前があり、前者は西海、後者は古座方言・熊野方言となっている。

この鯨史稿の中で、コクジラには、アオサギとシ

ヤレの2品があるとしている。青崎という名前は、既に書いた川之江の第2号鯨の絵に見られているが、本当は青鯨であろう。この項で、いろいろの本の記載を引用しているが、結局、アオキギの方が皮が白くて油も白く、シヤレの方は油の色が赤いとなっている。

ところが明治の終り頃日本にやって来て蔚山で多数のコクジラを調べて、膨大な報告書を書いたアンドリウスは、日本人はコクジラにアオサキとシロサキの2種があり、アオサキは油の色が赤く、シロサキは油の色が白い、と全く逆のことが書いてある。さらにシロサキという名前は、日本の本には出てこない。シヤレとアオサギの2品があるとなっている。あるいは単にコクジラとし、又一種青鯨と云有皮白く油白し大に吉とす油燃久し一盞の油よく冬の夜を通す、となっている。これは言葉の行き違いの問題かと思うが、コクジラの古典とも言うべき、この報告書にこのような誤があったのは意外であり、訂正して置かなければならない。

日本の捕鯨とコクジラ

日本人が鯨を獲ったのは、遠く万葉の時代に遡るようであるが、業として捕鯨を行なったのは元亀年間（1570—73）だとされている。捕鯨と言うとすぐ熊野だとか土佐のように、黒潮が岸を洗っている、外洋性の海岸を考え勝であるが、実は伊勢湾や三河湾なのである。ここから捕鯨がスタートしたのである。つまり日本の捕鯨も、内湾捕鯨として出発したのであり、これを行なったのは、昔の尾張や三河の住民であり、その中心地は師崎であった。ここから多くの、銚打ちの名人が出て、それが三崎に行ったり、太地に行ったりした。そこで考えられるのが、では最初に捕獲された鯨の種類は何かということである。手投げ鉾で獲る以上、死んでも水中は沈まない鯨でなければならない。とするとセミクジラとマッコウクジラとなる。セミクジラは大きくて大変である。網取り式捕鯨が開発されて、やっと本式に捕れだしたと考えるとよい。マッコウクジラは沖合性であるから、このような所にはやって来ない。そこで考えられるのがコクジラである。沿岸の浅瀬にやって来た時、鉾で容易に捕獲することが出来るであろう。捕鯨業が網取り式になってからも、コクジラは網を使わないで、鉾だけで獲っていた。

今年の3月か4月ごろ、1頭のコクジラが伊勢湾に入り込んで、そこに滞在していたという。このことは誠に暗示的である。何千年か前の御先祖様の記憶が、現代っ子に甦ったような気がする。ただしコク

ジラが伊勢湾に入って来ていたという、過去の資料はまだない。伊良湖岬博物館にも鳥羽の海の博物館にも、地中から掘り出されたという、鯨の骨があるが、これは両方共セミクジラの尾椎の一部であると思うし、その年代もそれ程古くはない。

網取り式捕鯨になったのは延宝3年(1675)であるが、それ以来この方法は和歌山県はもとより、高知、三重、山口の各県及び九州西岸で大々的に行なわれるようになった。捕獲の主体はセミクジラとザトウクジラであったが、これらの各地でコククジラも捕獲された。

この時代の捕獲統計で一番整っているのは高知県である。ここには津呂と浮津の二つの捕鯨組があり、漁場を東と西の二つに区分して、毎年両組がそれぞれ漁場を交換して操業した。コククジラの捕獲は、年によって勿論変動はあるが、双方で約10頭ぐらいのものであった。和歌山県と三重県の捕獲統計は完備していないが、それほど多いものではなく、これら3県の、いわば太平洋岸の系統のコククジラの捕獲は、合計して1年に30頭ぐらいのものであったと推定される。

日本海側では、山口県の通浦の捕獲は、同地の向岸寺に残っている。鯨の過去振より、木村さん(現在の大崎さん)が計算しておられるが、これも多くはない。さらに同じ山口県の川尻浦の捕獲統計は、元禄11年(1699)から慶応21年(1886)までのものが、各10

年毎に纏められて、大日本水産会報告書第104号(明治23年)に出ている。これは鯨種別に出ているから、その模様が判明する。ただわからないのが九州西岸のものである。宍岐における捕獲頭数は弘化2年(1845)から万延2年(1861)までのものが、同じく上記の大日本水産会報告に出ているが、それは捕獲総数であって、鯨の種類別には出していない。しかしながらこの系統群のコククジラの捕獲はあまり多いものではなく、おそらく1年に20—30頭ぐらいのものであったと考えられる。したがって太平洋系のものを加えても、日本沿岸にやって来たコククジラの捕獲は1年に60頭あるいはこれ以下と推察される。

韓国の蔚山でコククジラが捕獲され始めたのは、それ以後のことであり、捕獲のピークは1912年の193頭であったが、それよりなお6年間は100頭以上の捕獲が続いた。1933年に2頭捕獲されたのが最後であったから、この年を以て、アジア系のコククジラは絶滅したと説く人もいるが、それは誤である。蔚山におけるコククジラは、天然記念物に指定され、捕獲禁止となったのである。ブラウネル等は、戦後韓国で捕獲されたコククジラの数を報告しているが、それによれば1948年から1966年までの間に、少なくとも67頭のコククジラが韓国沿岸で捕獲されたと報告している。年平均3.5頭のコククジラが捕獲されたこととなる。

せ た し あ

鯨研英文報告の最新号(第33号)に、大村、粕谷、加藤、和田の共著で、中部南太平洋及び東部印度洋のニタリクジラの骨学的研究という論文が掲載されている。ここに使用した標本は、科学的調査研究のための特別許可に基づいて捕獲されたもので、1977—78年漁期に中部南太平洋で、全身骨格1頭分と鼻骨5頭分、翌1978—79年漁期に東印度洋で頭蓋骨と下顎骨1頭分と鼻骨5頭分が、それぞれ標本として採取された。

第1年度の全身骨格の大部分は、北海道大学水産学部(函館)に送って、油抜きのため、その校内の空地に埋め、1980年5月初旬に掘り出して、各種の測定や写真撮影を行なった。ただし鼻骨だとか立羽の骨、それに三ツ矢の中の小さな脊椎骨等は鯨研の裏庭に埋めた。

第2年度の頭蓋骨と下顎骨は千葉県鴨川のシーワ

ルドの構内の空地に埋めて貰って、1980年10月に掘り出して、計測等調査を行なった。この年採取した鼻骨は、鯨研の裏庭に埋めて油抜きをした。

なぜこのような調査をしたのか、それはニタリクジラはあまり大きな回遊をしないで、いわば地方的な群をなしていると考えられるが、骨格つまり内部構造の面ではどうであろうかという問題である。それにニタリクジラの骨格の研究は極めて少なく、アメリカのミード博士などは、骨格でニタリクジラの特徴とされている形質は信頼できない。特に鼻骨の形はそうであり、これによってイワシクジラから分離することは出来ない、とまで極言している。彼の論文は1974年のIWCのラホヤ会議に提出されたのである。

そこで水産庁にも、船団の皆さんにもお願して、骨格にプラスして、鼻骨の部分を一両年度に亘って各5

頭分ずつ採集して貰った次第である。

研究の結果は、われわれの行なった過去の研究が正しかったことを証明したものであった。ニタリクジラの骨格に関しては、大村が1959年に発表した論文があるが（英文報告第14号）、この標本は鮎川で捕獲したものであるが、今回得られた結果はこれを裏書きするものであった。

先づ脊椎骨数であるが、これは54個で、鮎川のものと同じである。ヒゲ鯨でも脊椎骨数は、種類によって一定していて、ニタリクジラでは54—55個であるが、イワシクジラでは56—57個である。

次に問題の鼻骨であるが、これも全く同じである。鼻骨は噴気孔の後方にある小さな骨で、クジラ類では一般に退化している。この鼻骨は左右の2の骨から成っているが、イワシクジラでは中央部が突出していて、左右の両端はこれより後方となっている。これに反してニタリクジラでは左右の両端が前方に長く伸びて、その外側の前上顎骨の上を広く蔽っている。鮎川の鯨も、南太平洋の鯨も、印度洋の鯨も、全く同じである。

脊椎骨での特徴は、胸椎から尾椎にかけての各骨で、トゲ突起がニタリクジラでは、著しく後方に寝ているが、イワシクジラではそのようなことがなく、殆んど直立していることである。この点は鮎川の鯨も南太平洋の鯨も全く同じである。

下顎骨では、ニタリクジラの方が頑丈であり、いわゆる骨太である。下顎骨の中央部の高さに対する幅の比率は、日本近海のイワシクジラでは54%であるが、ニタリクジラでは64%であった。この比率は、南太平洋のものでは66.7%、印度洋のもので68.6%であった。日本近海のニタリクジラよりさらに骨太であったが、それに相当するイワシクジラの測定値がなかったから、比較はできなかった。

以上の外いろいろの比較を行なったのであるが、今までニタリクジラの特徴と考えられていたものは、その通りで、過去に得られた知見を覆えずものは何一つないのである。

それではミード博士は何故このようなことを述べたのか。それは同じアメリカのミラー博士の論文の読み違えであると思う。ミード博士はアメリカ国立博物館に保管されているイワシクジラの骨格を調べて、この中から何個体かは、イワシクジラではなくて、ニタリクジラであるとしているのである。これは当然のこと

である。ニタリクジラは最近になって、やっとイワシクジラとは別種であることが一般に認められたのであるが、これらの骨に関する研究は、それ以前のものであるからである。

このような標本の1に1919年にフロリダのパプロ・ビーチに漂着したヒゲ鯨がある。この鯨を1924年にミラーがイワシクジラとして発表しているが、ミード博士は、この鯨のヒゲを調べて、明らかにニタリクジラであるとしているのである。ところがこの論文は、外国の研究者がニタリクジラの研究を行なった時、しばしば引用して、これと比較しているのである。したがって、これがイワシクジラではなく、ニタリクジラであったとしたら、その論文そのものも否定されることともなり、ニタリクジラの特徴そのものが否定されることとなる。残るは外部特性、つまり、ヒゲ、敵、頭の上の側線（lateral ridge）だけとなる。彼は単に、ヒゲを調べて確認したと述べているだけである。こんな暴力が許されてはたまらない。

これが今回のわれわれの調査の本当の動機であった。そこでミラーの論文で一つ一つ当たってみた。先づヒゲであるが、その写真もミラーの論文に出ている。その形は典型的なイワシクジラのヒゲで、長くて幅が極めて狭い。文中の記載を読んでみてもイワシクジラであって、ニタリクジラではない。鼻骨もイワシクジラ型である。上顎骨も横から見ると下に曲がっていて、イワシクジラ型である。下顎の写真から、下顎骨中央部の高さと同幅を測定し、高さに対する厚さの比を計算すると55%であって、イワシクジラ型である。脊椎骨を横から見た写真も載っているが、腰椎ではトゲ突起が直立していて、これもイワシクジラ型である。

以上より判断して、パプロビーチ標本は、ミラー博士の報告通り、イワシクジラが正しい。したがってこの鯨のヒゲ（実物がある由である）を再検討する必要がある。これがわれわれの結論であった。彼はミラー博士の診断を誤診であるとしているが、その前に科学者としての冷静な検討が必要である。

最後になったが、この論文が出来上るまでに多くの方々の御厄介になっている。遠洋水研の大隅さん、共同捕鯨の方々、船団の皆さん、北大水産学部の皆さん、鴨川シーワールドの御一同。ここに厚く感謝の意を表します。これでニタリクジラに関する基礎研究は一応終ったこととなります（大村）。